

——小柴さんの疎開記が思い出させてくれた疎開の記憶——

椎名 利 (33 化工)

私は横浜生まれ（昭和 8 年）で 6 歳まで横浜で育ったが、小学校に入学寸前、神戸に移り成徳小学校で 5 年生まで過ごした。

戦況が深刻になる中、縁故疎開または集団疎開の選択に迫られ、昭和 19 年 6 月淡路島の志津に集団疎開した。宿舎は海洋少年団のもので海岸に建っていた。30～40 畳ぐらいの部屋が各々 1 部屋ずるある 2 階建てだった。せいぜい 1 人 1 畳といった広さだったろう。

4 年生と 5 年生が一緒に 60 人ぐらいだったろうか。授業は付近の学校の教室を借りて行われていたが、授業らしいものが行われていた記憶はない。前の砂浜で遊んだ。

腹が減って仕方がなかった。3 か月もたつと家に帰りたくないと泣き出す者もいた。それが平素ガキ大将面していたものだったのは意外だった。

母が茨城の実家に疎開することになったと、私を迎いに来たのは 10 月ごろだった。

私は嬉しかった。しかし、それを表すわけにはいかず帰りたくないと泣いた。

去っていく私に皆が寄せ書きしてくれた。

中に『今度会うときは靖国神社だね』と、書いたやつがいた。

今考えると、『教育は恐ろしいものだ』と、つくづくと思う。

疎開先の茨城県の水海道（今の常総市）の小学校では関西弁をからかわれたが、この地方の方言『……だべ』を使う気にはならなかった。

ちゃんちゃんこを着て荒縄で縛りわら草履をはいている者も数名おり彼達から、「お前はわら草履も編めないだろう」と馬鹿にされた。

また、堆肥にするための草刈りが毎日の宿題だった。刈ってきた草の重さがグラフになって教室に貼られている。鎌の使い方もままならず、堆肥になる草の生えている場所もろくに知らない私のグラフはとても貧弱だった。

こんなことで人間の能力が評価されるのかと思ったら、お先真っ暗で『俺の人生しれたもの』と思った。

しかし、終戦を経て中学校（旧制中学最後）に入学すると状況は一変した。

この田舎の中学には疎開者も数名いたが、忘れることができない 2 人との出会があった。

その出会いが、私のバックボーン形成の原点だったと思う。

一人は T 先生だった。T 先生は千葉大の工芸意匠科（インダストリアル・デザイン）の助教授で、結核療養のため故郷に戻り、中学では幾何を教えていた。当時 30 歳をいくらか出ていなか

ったのではなかっただろうか。

先生は自分のうちに月一回生徒を集め金曜会なるものを催してくれた。十数名の集まりは学校の授業とは関係なく、めいめいが先生のところにある本を見ながら先生と対話することだった。いつも話題に上るのは、終戦直後で雑誌などが少ない中で、先生が毎月とられていた真新しい美術誌、『アトリエ』『美術手帳』だった。その中で議論の中心になるのはピカソ、マチスだった。

「キュービズムとはなにか」「モジリアーニの人物の顔はなぜ長いのか」とか質問が出る。

それに先生は丁寧に応えてくれ、わからないながらも絵画に興味を持った。

また、『アサヒグラフ』が数年にわたり保存されていたが、その中の写真には歴史があった。『満州国皇帝陛下』、『二・二六事件』、『中京商業と明石中の 24 回の延長戦』の写真などがあり話が弾むかと思えば、太宰治の情死事件に話題が飛んだりする。まさに子供がおもちゃ箱をひっくり返したようだった。

疎開組も高校になるのを機に、大部分が転校して行く時、T 先生も千葉大にもどられることになった。別れの時、T 先生は私に「この町の人々は各々継げる家業を持っているが、君はそのようなものを持っていない。大学で好きなことを学べ。だが、君が希望するような大学に行くにはここの授業ではだめだ」と言われ、「受験勉強は自分でやれ」と『代数のあたま』と、いう参考書を示され「3 回読むように」と言われた。以後受験という目標を意識した。

この T 先生とは社会人になってからもたびたび尋ねたが、先生は千葉大教授在職中に亡くなられてしまった。

あとの一人は、著名な免疫学者多田富雄君との出会いだった。彼は結城の出身だが地元には女学校しかなかったため（昭和 21 年当時）、叔父さんのところに下宿して水海道中学に入学していた。この叔父さんはレコード屋を営む文化人だった。なにが親しくさせたのか、今では判然としないが、「今日は叔父さんがいない」と言うと、授業を抜けて彼の下宿に行きレコードを聴いた。

ゲルファルト・フィッシュが歌う『冬の旅』——中でも二人とも好きだったのは 11 曲目の『春の夢』だった——『美しい水車小屋の乙女』やカラスの歌う椿姫の『ああ、そは彼の人か』などのアリアを飽きることもなく聴いた。SP 時代の代表的指揮者はエーリッヒ・クライバーだった。これがクラシックに親しむ切掛けだった。

叔父さんのところは本もあった。当時話題の『チャタレー夫人の恋人（初版）』も読んだ。バルザック、モーパッサン、ジッド、太宰治などの小説や当時話題になった出隆の『哲学以前』など手当たり次第だった。

昭和 26 年 3 月のある日、——雲一つない晴天の温かい春の日だった——彼とテニスをして別れた。

彼はすでに男女共学になった地元の結城高校に転校し、私は横浜に引越し 6 年にわたる疎開生活（高 2）が終わった。

(2014-9-22)